

## ●天候に左右されないおぼこ米

今年は6月の低温から続き7・8月の記録的な大雨被害により、田植えの盛期は平年よりやや早かったものの出穂が遅れ、さらに追い打ちをかけるように登熟期間は曇雨天が続き低温気味の経過をたどり登熟が緩やかに進んでいきました。特に田植え作業が遅くなった圃場ではさらに出穂が遅れ、籾・枝梗の黄化も遅れました。晩生品種では未熟な稲姿のまま登熟が不良の圃場も散見されました。

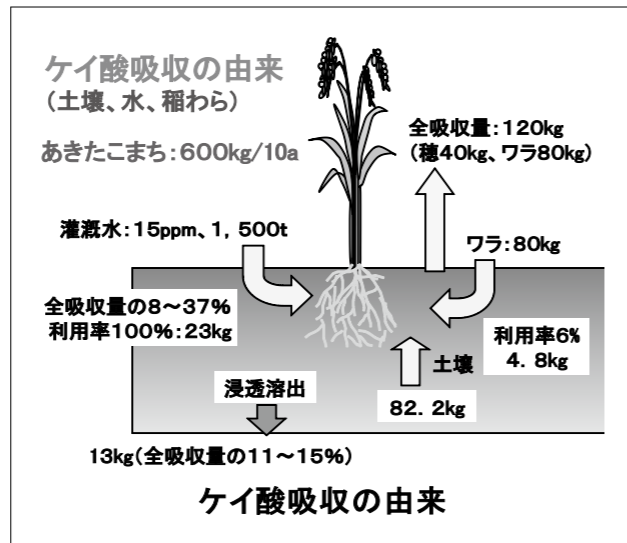
## ●登熟期間を確保する栽培管理を

極端な早植、遅植は高温障害や登熟不良をまねきます。可能な限り稚苗は5月15日～25日頃、中苗では5月20日～30日頃の田植えを基本として、田植え日は15℃を下回らない日に行うことが重要です。特に晩生種は出穂が遅くなると、登熟完了前に登熟限界気温（平均気温15℃以下）が訪れ、今年のように登熟不良による減収となってしまいます。そこで晩生種から播種を始め田植えも早めに行い、生育量と登熟期間を十分に確保します。栽植密度も極端な疎植では全籾数・千粒重の確保が天候によって左右されるため、平坦部では小苗（4～5本）で坪70株、中山間部でも坪80株を基本とし、太い有効茎を育成して安定収量を確保しましょう。登熟には出穂後30日ほど必要です。コンバイン作業を優先するあまり、出穂後2週間ほどで落水している圃場が見られました。早期に完全落水を行うことは、根の活力低下を招き下葉枯れが進み、登熟が滞る要因になります。排水不良田において登熟を優先する水管理を行うには、春先のサブソイラー等を使用した透水性の改善と、中干し時期の「溝切り」による排水性の向上が重要です。

## ●管内の7割の水田ではケイ酸が不足しています

稲はケイ酸植物ともいわれ、作物の中では最も多くケイ酸を吸収します。あきたこまちを10aで600kgの収量を上げるためにはケイ酸は120kg必要です。しかし右の図を見ると、土壌等から補給されるケイ酸は101kgしかないため19kgのケイ酸が不足しています。不足したケイ酸は毎年、施肥により補う必要があります。

ケイ酸は今年のような低温時にも稲に吸収されるため減収を最小限に抑えることが出来ます。今年の異常気象により稲が倒伏した方、WC Sなど圃場に残渣が残らない場合などではケイ酸不足も考えられます。また、大豆後作など土壌チッソの発現が大きくなるほ場でもケイ酸資材の施用は必須です。



### ケイ酸資材

	<b>おぼこロマン大地</b>		<b>ケイ酸加里</b>
	ケイ酸17%、リン酸3%		ケイ酸34%、カリ20%
	散布量: 40~60kg/10a		散布量: 40~60kg
	ケイ酸エースを配合しているので利用率が高い、機械散布に適した300kgフレコン有 (要予約)		く溶性加里と流防止にくいケイ酸を配合

# 平成29年度 総括版

## ●稲作生育概況 仙北地域振興局農業振興普及課水稻定点調査結果より

### 1. 今年度の生育経過について

- 田植時期は気温が高く活着は良好だったものの、6月は低温寡照で経過したことからの生育の遅れや下位分けの抑制がみられました。特に田植えの遅かったほ場で低温の影響が大きく見られました。
- 7月は比較的好天に恵まれ、生育量は回復に向かい、葉色は濃く経過しました。



- 7月22日～23日、8月24日～25日の豪雨により一部地域で冠浸水被害がありました。
- 出穂期は平年より4日遅い8月7日でした。低温や日照不足の影響で登熟は緩慢で、刈取盛期は平年より7日遅い10月5日でした。断続的な降雨等の影響で刈取終期（95%）は平年より11日遅い10月19日でした。葉いもちの発生は少なかったものの穂いもちが散見されました。

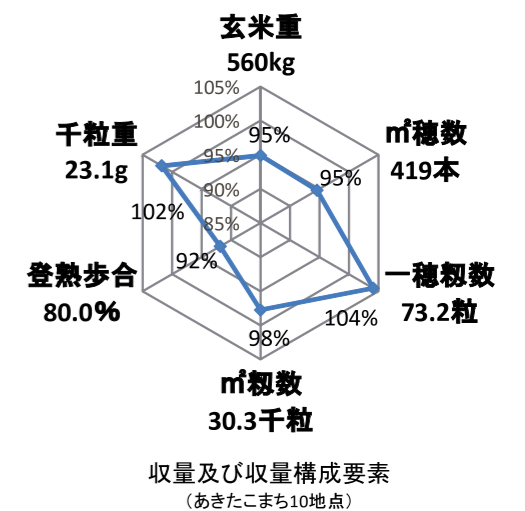
### 2. 作柄概況について

～県南地域の作況指数は「97」の「やや不良」10aあたり収量は「552kg」（東北農政局12月5日公表）～

水稻定点調査ほにおける10aあたり収量（篩い目1.90mm）は平年より少ない560kg/10a（平年比95%）でした。

収量構成要素を見ると、㎡当たり穂数は419本（平年比95%）で平年に比べて少なく、一穂籾数は73.2粒（平年比104%）で多く、㎡当たり籾数は平年並の30.3千粒（平年比98%）でした。千粒量は平年並の23.1g（平年比102%）でしたが登熟歩合が80%（平年比-7.1ポイント）と低かったことから、10aあたり収量は少なくなっています。

なお、11月29日現在のJA秋田おぼこの1等米比率は97.3%で、落等理由は充実度不足、整粒不足が多くなっています。



## ●来年に向けて いもち病をはじめとする病気にかからない苗づくり

今年度おばこ管内では穂いもちの発生が多数みられました。その原因として今年の天候がいもち病に好適だったことも考えられますが、苗いもち防除をしなかったことによる持ち込みでの発生や箱処理剤を少量施用した圃場で葉いもち病の激発などが起きています。この状況を見ると天候だけの問題ではないことから来年度は強い苗づくりを心がけましょう。

## ●苗いもち防除の徹底 箱処理剤を効果的に使用しましょう

「苗いもちなければ葉いもちなし」といわれるように、苗いもち防除を徹底することにより葉いもちにかかるリスクが減少します。箱処理剤はいもち病に対して予防効果しかありません。薬剤防除ではベンレート水和剤が播種時～播種7日後頃、ビームゾルは緑化始期に使用し苗いもちを防除して健全な苗を移植しましょう。また箱処理剤を使用すると長期間本田でのいもち病の感染を抑えることができ、コストや防除回数の削減にもつながります。しかし箱処理剤は剤によって使用時期が異なります。使用時期を間違えてしまうと薬害の原因にも繋がりますので使用方法をよく読んで適期散布をしましょう。また規定の薬剤量を苗箱に散布しましょう。箱処理薬剤の量が不足してしまうといもち病を抑えることが難しくなります。

苗いもち防除と箱処理剤を組み合わせるといもち病を予防しましょう。

### 苗いもち病防除剤

薬 剤 名	使用倍率	使用量	使用時期
ベンレート水和剤	500倍	500ml/箱	播種時～播種7日後までにかん注
ビームゾル			緑化始期（ベタ張り除去後）にかん注

## ●穂いもち発生を防ぐ施肥体系

今年は低温等により肥効が遅れ、出穂後の不順な天候により、籾・枝梗の黄化が遅れ穂いもちの発生が多くなったと考えられます。幼穂形成期には天候に合わせた生育調整ができるよう基肥量を考慮し、適切な防除に努めましょう。

## ●苗立枯病予防

今年は4～5月天候の良い日が続いたことから発生は少なかったが、来年への対策として床土に焼土や人工培土を使用していない場合は、タチガレエースM剤を使用して予防に努めましょう。

また過かん水などによって育苗ハウス内が蒸れてしまうと立枯病の発生を助長しますので、ハウスの開閉等適切な温度管理をして予防をしましょう。

## ●もみ枯細菌病予防

今年の育苗巡回等で発生が散見されました。催芽・出芽温度は30℃を目安にして、こまめに温度計で確認するなどもみ枯細菌病の発生が助長される32℃を超えないよう適切に管理しましょう。対策としてはテクリードCでの種子消毒やイチバンを使用しての育苗器具の消毒が挙げられます。

## ●来年度に向けて 雑草防除を徹底し斑点米カメムシ対策をしましょう

今年度はおばこ管内、斑点米カメムシによる被害は少なかったです。しかし圃場を巡回するとヒエやホタルイが散見されました。ヒエやホタルイが繁茂すると収量低下だけではなく、斑点米カメムシのすみかとなってしまい斑点米を劇的に増加させてしまいます。

今年度雑草の多かった圃場は来年も注意が必要ですので、初期剤＋一発剤を基本として徹底的に雑草防除しましょう。

## ●除草剤を効かせる環境づくり

雑草防除は、除草剤の効果を最大限発揮させる圃場づくりが重要です。除草剤は散布後水により拡散し、その後3日ほどかけて田面に処理層を作り除草効果を発揮します。この間に田面が露出してしまうと、作られた処理層が効果を発揮しません。雪解け時に雪が残っているところは高い場所ですので切り土し、コンバインの旋回跡などの低い所に盛りましょう。また、耕起、代かき作業は丁寧に田面の凸凹を無くしましょう。

また、圃場の水持ちがとても重要です。代かきを荒代かき、植え代かきの2回かきをするなど丁寧に水漏れしにくい圃場を作りましょう。さらに畦畔のネズミ穴などから漏水する場合があります。畦塗り機や畦マルチなどでしっかりと畦畔からの漏水を防ぎましょう。

## ●圃場にあった除草剤を使用しましょう

除草剤には雑草によって得意不得意があります。自分のほ場にある雑草をよく見極めて効果的な除草剤を選択しましょう。

### 草種別防除体系 例

雑草種類	初期剤	一発剤
ノビエ	メテオ ピラクロン ショキニー豆つぶ ホットコンビ	ベンケイ、ウィナー、カチボシ
コナギ		コメット、アップレZ、アクシズMX
ホタルイ		ベンケイ、コメット、ウィナー
アゼナ		トップガンGT、アピロキリオMX、アップレZ
オモダカ		メガゼータ、コメット、カチボシ、アクシズMX

※一発剤は初期剤散布後7～10日後に散布しましょう

一発剤散布後に残草してしまった場合は中後期剤で追加防除を行いましょう

ヒエ剤	ヒエクリーン粒、豆つぶ	広葉剤	バサグラン粒、液剤
ヒエ・広葉混合剤	クリンチャーバスME、ヒエクリーンバサグラン粒 アトトリ粒、レブラス粒、フォローアップ粒、ワイドアタックSC（遅効性のため早めの散布）		

### 畦畔の除草と薬剤防除でカメムシを徹底防除

散布時期	薬 剤 名	希釈倍率/散布量 (10aあたり)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
出穂期 10日後頃	スタークル粉剤DL	3kg	収穫7日前まで	3回以内
	スタークル液剤	1,000倍/60～150ℓ		
出穂期 24日後頃	キラップ粉剤DL	3～4kg	収穫14日前まで	2回以内
	キラップフロアブル	1,000～2,000倍/60～200ℓ		

斑点米カメムシ類は地域全体となって防除を行う必要があります。おばこ一斉草刈りデーや共同防除などで適期に管理や防除を行うように心がけましょう。